

阪神港

ゲート処理時間最大8割削減

CONPAS 第2回試験運用

【関西】阪神港(神戸港、大阪港)で導人が予定されている新・港湾情報システム(CONPAS)について、国土交通省近畿地方整備局は27日、8月下旬から神戸港で実施した第2回試験運用でトレーラーのゲート処理時間が最大8割削減されたと発表した。参加者からもゲートでのトラブル削減が期待できるとの意見が出たという。

1回同様PC-18の上組コンテナターミナルで8月23日～9月3日の間に実施。海運貨物取扱業者5社、海上コンテナ運送事業者10社、車両27台が参加し、実際に営業コンテナ83本を処理した。

第2回試験では、搬出予約制度▽貨物情報の事前確認▽PSカードの活用▽携帯端末による行き先表示の各機能の運用を確認。同時にこうした処理効率化の効果を検証した。

トレーラーはCONPASの貨物情報の事前確認を介し、コンテナの搬出が可能であることを確認して来場。また従来のプラカードによるヤード内行き先確認に対し、ドライバーはPSカードを活用し、携帯端末の行き先表示方法でゲート処理を簡略化した。

その結果、トレーラー1台当たりのゲート処理時間は、非CONPAS車に比べ約6～8割削減されたという。また貨物情報の事前確認の活用で、手続きの不備などが発生している車両の来場を削減し、ゲート処理時間増加を防ぐ効果が期待できることも分かった。



第2回試験運用では、PSカードの活用などによるゲート処理効率化を検証した

試験運用の参加者からも、搬出可否情報が事前に入手できることでゲートでのトラブル削減が期待できるとの意見が出た。

一方、搬出に際し予約期限後や当日の突発的な対応、高齢化するドライバーを念頭に、携帯端末操作の簡略化などを課題に挙げる声もあった。